

JPSC 発足40周年に寄せて

No.13 関口一郎

昭和23年「コーヒーだけの店」としてランブルは西銀座の狭い路地奥の10坪程の小さなスペースで産声を上げた。幸い評判もよく遠くからお客様が、わざわざ尋ねて来られ、なかには有名な識者も見えていた。私が店の一角で旨そうにパイプを吸うのをみてか、パイプを吸うお客がポチポチと出版、報道、映画、演劇関係者などなかにはお医者も、当時はパイプタバコは主にアメリカ産が圧倒的でスモーカー同志は情報はもとより現物を交換をして喜んだり、羨ましがったり、一寸意味が違うが一種の梁山泊のようであった。店が開業以来10年程になり、パイプ族は一騎当千の者もいた。

たまたまパイプスモーカーのクラブを創ろうと一部のものから提案があり、まず菊水を中心に話が煮詰まり、昭和42年4月発起人13名で旗揚げをした次第。毎月入会の申込みが多く翌年に37名、毎月月例スモキングコンテストを実施、毎年メンバーズパイプの配布、会誌「PIPE」季刊でクラブ入会を呼びかけ、入会者が続々、コンテストをやるには会場が手狭になった。菊水の内藤氏のご母堂とそば屋の「よし田」の女将と知り合いと聞き、口をきいてもらい会場は確保できた。

昭和44年からスモキングコンテストを実施、採点方法は自動車関係の大久保敦彦氏のモーターグランプリ方式を採用する。

昭和47年の創立5周年記念事業として全日本スモキングコンテストを開催、その後の JPSC の歩みは梶浦氏の記事をみてもらいたい。氏の綿密な統計、分析を一読すれば色々なことがよく解る、全く頭の下がるおもしろい。

岡部氏の記事の補足の又補足になるかもしれないが、現行の申し合わせに通じる約束ごとを含めて気付いたことを書く。全国大会、ローカルの大会でもタバコの量は3gなのに JPSC の月例コンテストは2gでやっている。

理由はよし田そば屋の時代、店の閉店時間が9時で、3gだと70分以上も吸うのがいると閉店とにらみ合わせやきもきする、そこで2.5g位ならと暫定的に決まった。後で2gに決まった。

よし田そば屋で断られた理由は又ある。一時期コンテストの参加者が2.3名で流会となる。座敷を一問貸切にすると2.3名では売上が少ない。それだけでなく注文が「もり」一つで帰る人もいた。しょうがなく会の経理から3,000円位つつんでいたこともある。それが理由で出席をうながす意味から流会の場合は出席者には出席点が2点となった。

1971年よし田そば屋から最后通告がきた。座敷は閉店後、支店を含む従業員の宿舎になる、従業員からタバコの脂臭くて睡れないと苦情がでている、悪いがどこか他でやってくださいと。

そこで四谷のルノアールに場所替えした。立地がよくないのか会員の参加が少ない、どこかよい処を捜すことになり、現在のジュリエは偶然みつけた。ベリーグッド。

何分補足の補足なので、気付いたことを若い会員に知ってもらいたい、あれやこれやになったことをお許し願いたい。

入会するとき会員番号を決めることになっている。昔申込者が多かったとき、やたら会員を増やすと整理がつかなくなることを憂えて100名で止めること、通算延番号にすると配布のパイプに刻む余地がなくなるので99で止めた。

会員番号は欠番から本人の希望を聞いて決める。配布する数が多くなると海外のメーカーでも同一の型を100本は無理とのことで配布メンバーズパイプは止めた。

40年間、会史上忘れられない人物は、なんと言っても松山荘二氏だったと思う、季刊「PIPE」を創刊してから、永い間一人で会誌を休刊なしで継続、なくなるまで豊富な知識で内容のある記事で、会誌から多くの会員は勉強したこととおもう、よく会が永年継続できたことは、一重に会誌の発行があつてのこと、只今会誌は休刊しているが、我が JPSC は多士済済の御仁が多勢いるから、何とか誰か復刊を手助けしてくれないかな。

会誌のことでは毎号の表紙を飾った写真家のことも一言、会員の誰彼不定順で顔写真で多くの会員は楽しみに自分の番が来るのを待っていたものだ、因みにその写真家は畑野進氏だが亡くなった。

私が会員の中でユニークだとおもう人物は今は亡き大森一生翁を挙げる、歳が近かったせいか、うまが合っただけで奇怪な手紙をいただいたことがあった、

何んといつてもスモーキングコンテストの喫煙タイムが圧倒的に強かった、梶浦氏の集計表でも分かるように、生涯名人位を会から差し上げ、翁の記録は除外してしまった。それまでの優勝記録は27回もあり他をよせつけない程だ。参加者を平均的にするため時間ハンディ法をとりいれてみたこともあり止めた。

大森翁は月例のコンテストでは毎会新記録を出すほどの人であるが、外部の大会では一度も優勝したことがない。よし田そば屋のように畳敷きでないとだめ、冗談に会場に畳敷きを持ち込むという話も出た。

本会に例外の人物が一名いた、白木原宏明氏の世話人当番のとき氏の秘書で白木原氏の代理で世話人の仕事を永くやっていた人は入江勤さんでこの人はタバコを吸わない念のため。

ユースドパイプオークションは会の人気行事として定着している。オークションは早期すでに始めている。会の年表によると、発会の翌年1968年3月に試みられている。正月と7月の年2回の定着は1977年からそれまでは不定期にやっていた。初めはパイプのみであったが出品数が少ないので喫煙関係ならよいということになり、後日タバコ関係でもなくてよろしいと、これから年2回の行事となった。

競売のフリ手は初期から松山氏が受け持っていたが、亡くなってから会の名物男、外川君が面白おかしく上手に運営している、他の会員ではできないだろう、その意味では逸材の一人である。

1983年に発刊した「パイプ大全」今や貴重本として評価されている、この本の発行は2、3年前から準備にかかり、会員の内から手分けして持分を決め、それぞれが得意の受け持ちを引き受けて着手。

私がおこがましいがタバコの缶とタバコをカラーで撮るようにとのこと、タバコの缶を撮るには、現物を集めなければならず、苦労したがついに200個はかり集めた。この中身のタバコはいつの間にか全部吸ってしまった。この本は松山氏がいなければできなかったのではないでしょう。

本「JPSC」の会則には会員は男性だけとなっていない。極初期に柏木大安氏が1名の婦人を連れてきた、入会希望者で柏木氏のお嬢さんの洋裁の先生と言う触れ込みとゆうこと。岡部氏が絶対反対といていた。戦后女性領域が男性の領域を犯し始めて、今や男性は髭剃りとパイプを吸う二点しか残されていない、パイプをとりあげられてはたつ瀬がない、とこぼしている、この御婦人は市川滯さんで、後日世界大会で婦人の部で優勝、時間記録122分12秒は歴代2位。婦人の会員がいると皆行儀がよくなると言われている。

年間2回程度の旅行会は、柏木氏の教会のバスが利用できた時代だった。専売公社の職員を招いての講演は有益だった。私自身店の仕事の都合で、地方大会にも参加していないので申し訳ないと思っています。旅行会ではさぞ面白い話もあったと推察はしていますが残念です。

昭和42年に13名で発足したが、現在まで発起人13名中菊水の内藤氏の会員番号 No. 1で私は13番で頭と尻尾の2名だけになりました。時々おもうことは退会者を含みあれだけ体に悪い喫煙といわれていたのに肺癌で亡くなったひとは“0”で不思議だ。

JPSC世話人代表・コーヒーだけの店カフェ・ランブル店主